

よみがえるヒュパテイア

——ある「異」教女性聖人の実像をめぐって——

足立 広明

はじめに

アレクサンドリアにヒュパテイアという名の女性^①がいた。彼女は哲学者テオンの娘であった。彼女は高い教養を修め、とくにプロティノスによって引き出されたプラトンの研究を成功裏に継承し、意欲を持って集まった人々にあらゆる哲学的学芸を開示した。それゆえ、あらゆる地域の知を愛する人々が集まり、彼女の許に馳せ参じた。^①

(ソクラテス・スコラスティコス『教会史』第七卷
一五章冒頭部分)

歴史を紐解くと、知る人ぞ知る、「隠れた有名人」とで

も形容すべき人物に出会うことがある。今から一六〇〇年ほど前、四世紀末から五世紀初頭にかけて、エジプトのアレクサンドリアで活躍した女性哲学者ヒュパテイアなどは、さしずめその典型例と言えるだろう。

彼女の名は、「最高の、最上の」を意味するギリシア語形容詞、ヒュパトスに由来する。その名の通り、彼女は当時最高の教養を身につけ、多くの門弟を導いて、人々の尊敬を集めた。六世紀の「異」教哲学者ダマスキオスによると、「彼女はディオファントスの注釈書、『天体の法則』、それにアポロニオスの円錐注釈書を著した^②」という。父テオン^③もムセイオンのメンバー^④として著名であったが、「彼女は父よりも天性の資質が優れ」、父の教える数学に飽き足らず、哲学を習得して街を闊歩し、「傾聴しようとする人々

にあるいはプラトンを、あるいはアリストテレスを、あるいは他の哲学者でも解釈して聞かせた」という。⁵⁾

じつさい、彼女の薫陶を受けた者は数多く、なかでもキュレネ主教となったシユネシオスは彼女宛を含む豊富な書簡を残している。⁶⁾そこからは、彼女が「ヒュパテア・サークル」とでも称すべき集団を形成していたことがうかがわれるのである。⁷⁾

しかし、ヒュパテアの名を有名にしたのは、なんといつでもその悲劇的な最期である。ソクラテスによると、「このような彼女にも、当時にあつては悪意が用意」⁸⁾された。彼女の講義を聞き、相談に訪れる人々が多くなると、それに比例して嫉妬や羨望の感情も増大した。ダマスキオスによると、その最大のものは、総主教キュリオスの嫉妬であつた。

その日、(キリスト教徒) 反対派の主教であるキュリロスは、ヒュパテアの家の前を通り過ぎた。すると、大勢の人々や馬が彼女の家の前にいるのが見えた。ある者は到着し、ある者は立ち去り、そして他の者は周囲に立っていた。彼がなぜ群衆がそこに集まってい

るのか、一体全体この大騒ぎは何なのか尋ねると、彼女に従う者たちによって、それは哲学者ヒュパテアの家で、今まさに彼女が彼らに挨拶しようとしているところだと告げられた。このことを知った時、キュリロスは妬みの気持ちに強く打たれ、直ちに彼女を殺そうと、それも一番ひどい殺し方をしてやろうと企み始めた。⁹⁾

ソクラテスによると、キュリオスのこの嫉妬は政治的なものであつた。当時キュリロスは、ユダヤ人を迫害して市総督オレステスと対立していた。そして、オレステスはヒュパテアと親しく、しばしば彼女に相談していた。これがキリスト教徒の疑惑を招き、彼女が主教と総督の和解を妨げる原因だという噂が流れた。そして――

彼らのうちのある者たちは、それゆえ荒々しい、偏狭な熱意に煽られ、その張本人は朗読者のペトロスであつたが、彼女が帰宅の途に就くのを待ち伏せし、馬車から引き下ろして、カエサレウムと呼ばれる建物へ連行していった。彼らはそこで彼女を素裸にし、オス

トラカ（陶片もしくは牡蠣の貝殻・複数形）で殺害した。彼らは彼女の体を引き裂いた後、その裂かれた四肢をキナリオンと呼ばれる場所に運び、そこでそれらを燃やした。¹⁰

同じソクラテスの記述から、事件は四一五年三月のある日に起こったと推定されている。¹¹ギリシア語の「ヒュパトス」には「最高、最上」のほかに、「最後」という意味もある。彼女はその名の通り、最高の学芸を身につけつつ、あえない最期を遂げてしまったかみえる。しかし、それはいつたい何の最後であったのだろうか。

十八世紀の啓蒙主義時代の歴史家にとって、この答えは明白であった。それは古典古代の学芸の死、文明そのものの終焉を象徴する出来事であり、野蛮と宗教、迷信の闇が古代に輝く理性と合理主義の光を呑み込んだ瞬間に他ならなかった。ジョン・トールランド、ヴォルテール、それにエドワード・ギボンなどによって定式化されたこのような見方は、十九世紀の作家や詩人のイマジネーションによって色付けされ、現在まで継続する。¹²ヒュパティアは迫害された科学の開拓者であり、フェミニスト研究者の先駆けとし

て学術雑誌の名前に採用された。¹³彼女を主人公とする映画も最近作成された。¹⁴我が国でも古くは村山勇三が大正時代に彼女を主人公とした小説を翻訳しているし、¹⁵近年でもマンガに登場する。¹⁶彼女はまさに知る人ぞ知る、「隠れた有名人名人」だったのである。

だが、伝説化されればされるほど、史実からは遠ざかっているように見える。少し史料を検討してみよう。ヒュパティアに対する蛮行が単なるレトリックや創作でなかったことは、立場を異にする複数の史料群がほぼ同様の事実経過を描写していることから明らかである。たとえば、七世紀のニキウ主教イオアンネスは、キュリオスの法灯を継ぐ立場からヒュパティアを糾弾する論陣を張っている。しかし、事実関係の経緯については重なる部分が多い。

イオアンネスによれば、「女の哲学者で、異教徒のヒュパティアが」、「魔術や天体観測、それに音楽」などの「悪魔的ぺてんを通じて多くの人々を欺き」、とくに市総督をたぶらかせて、彼が「教会への出席をやめてしまう」事態となってしまったので、キリスト教徒は上述バトロスの指揮の下彼女を探し出し、「死ぬまで引きずって」殺害した。その後、彼らはキュリロスを囲み、「新しいテオフィロス」

と称えたという¹⁷。これは前総主教テオフィロスが「異」教の牙城であったセラペイオン¹⁸を破壊したのに続き、キュロスが「異」教の最後の残滓を一掃する偉業を達成したという宣言であった。

イオアンネスが不都合な事実にも別の解釈を施して叙述せざるを得なかったのは、この事件がアレクサンドリアの市民の記憶に刻み込まれ、もはや消す術がなかったからであろう。ソクラテスは「この行為は、少なからぬ不名誉をキュロスのみならず、全アレクサンドリア教会にもたらした¹⁹」と述べ、ダマスキオスも「この出来事の記憶は今なおアレクサンドリアの人々の間で鮮明である」と述べている²⁰。

イオアンネスの宣言を読む限り、キリスト教対「異」教という啓蒙主義時代以来の通説は的を射ているかに見える。しかし、ヒュパティアの「悪魔的べてん」に欺かれた「多くの人々」には確実にキリスト教徒が含まれ、それに対してキュロス一党が危機感を持って犯行に及んだのである。また、「キュロスのみならず、全アレクサンドリア教会に」不名誉がもたらされたというソクラテスの言葉からは、キュロス支持派以外のキリスト教徒も存在し、彼らまでこの事件のおかげで不名誉を蒙ったというニュア

ンスを読み取ることができる。ダマスキオスの言う「アレクサンドリアの人々」も「異」教徒だけを指すとは考えられない。マリア・ジェルスカは、ダマスキオスの上述引用文最初の行にある「反対派の主教であるキュロス」という言葉を見逃すべきでないと指摘している²¹。すなわち、彼に従う以外の派が存在したのである。

アラン・キャメロンやピーター・ブラウンの研究以来、近年の古代末期研究では「異」教対キリスト教という二項対立の図式は支持されない²²。とくにアラン・キャメロンは史料を精査して、ヒュパティアに関する従来の通説を様々な角度から見直した。マリア・ジェルスカはこのキャメロンの研究を発展させ、彼女が「異」教やキリスト教を問わず多くの学生を引きつけ、横断的な知的サークルを形成していたことに注目しており、現在ではワッツらの研究がこれに続いていく²³。本稿はこうした研究を足がかりとしながら、啓蒙主義以降のヒュパティア像を批判的に検証し、さらにこれまでの研究で見落とされてきた点、すなわち、ヒュパティアが同時代のキリスト教女性聖人と共通する特徴を有していた点に着目し、後者と共有する時代風潮の中でその声名を高めた可能性を—まだ試論的展望にとどまるが—

提示しようとするものである。

第一章 伝説化されるヒュパティア…

啓蒙主義のヒロイン

a) 啓蒙主義からヴィクトリア朝時代

まずは、啓蒙主義とその現在に至る影響を分析、検証してみよう。

一七二〇年、もとは熱心なプロテスタントの自由思想家ジョン・トーランドは、次のようなとてつもなく長い題名の、しかし薄いパンフレットとっていい書物を刊行した。その題名とは次のようなものである。

『ヒュパティア—もしくは最も美しく、最も美德に満ち、最も学識があり、いずれをとってみても完璧な淑女。彼女はアレクサンドリアの聖職者団によってばらばらに引き裂かれたが、それは大主教にして、通常、しかしその名に相応しからざる「聖人」称号を付されるキュリオスのプライドと嫉妬心、残酷さを満足させるためであった』²⁴

彼は「短いが、しかしヒュパティアの人生と死について、古代諸著作が我々に提供する限りのことをすべて記述したい」として書き始める。そして、ヒュパティアは、「彼女自身の性にとつては永遠に栄光であり続け、我々の性（男性）にとつては不名誉であり続ける」と続いている。²⁵ 彼は先述ダマスキオスの叙述から、キュリロスがヒュパティア殺害の最大の扇動者であつて、彼に聖人称号を与え続けるキリスト教の教会伝統に疑問を呈する。最終第一二章は「キュリロスを聖人とするのは宗教に対する不名誉」と題され、「かくの如き野心家で、騒動好きで、残酷な男を『聖人』と称える」ことほど神と人間にとつて耐えられないこととはないと断じている。²⁶

彼の叙述には教会伝統への批判と、人間精神の自由を謳う啓蒙主義の最初の高揚を読み取ることができようが、決してヒュパティアの悲劇的な死だけに焦点を当てたセンチシヨナルな書き方はしていない。その叙述は彼女の人生を史料的に丹念に拾い上げつつ再構成しようとするものである。アレクサンドリア図書館の由来、父テオンの紹介、そして、弟子シュネシオスの書簡を引用しつつ、彼女が「ヒュパティア学派」を形成していく過程が年代順に描か

れる。そして、総督オレステスとキュリロス主教のユダヤ人迫害をめぐる対立からやがて悲劇に至るのだが、このように彼女の前半生の学芸活動に注目するのは、後述する現在の古代末期研究におけるヒュパティア分析とも重なる。また、彼が冒頭で、ヒュパティアの死をキュリロスとキリスト教会だけでなく、自分たち男性の恥辱としても引き受けようとする姿勢は、今日でもなおメッセージ性を失っていないように思われる。

トーランドの著作は小さいものであったが、その反響は大きく、その後啓蒙主義が本格的に進展していくとともに、ヒュパティアの再発見と賞賛はさらに高まっていく。とくに、代表的な啓蒙主義歴史家のヴォルテールが一七三六年に『ボリングブルック卿の重要な検証と狂信の終わり』のなかで、ヒュパティアの殺害をキュリロスにそそのかされた狂信的な群衆による野蛮な行為として糾弾している。²⁷ヴォルテールはヒュパティアの殺害は、彼女が強制的なドグマから自由で、自然の法則と人間精神の可能性を信じていたからだと考えた。この考え方はその後現在に至るまでの基調となる。すなわち、ヒュパティアはギリシアの合理精神と自由の最後を画す人物で、その死とともに野蛮と宗

教の支配する暗黒の中世が訪れるのである。

ローマ帝国末期に関して、人間精神、とくに市民的自由の精神が行き詰り、野蛮と宗教に道を譲るという見方を完成させたのは、言うまでもなくエドワード・ギボンである。彼はその『ローマ帝国衰亡史』のなかでヒュパティアを取り上げ、次のように書いている。後述するキングズリの訳など、日本におけるヒュパティア、ひいては日本における西洋古代末期史研究の受容と発展過程を知るうえでも、ここでは村山勇三訳で見よう。

こうして教長はまもなく一人の處女を犠牲に供することを扇動または承認した。そして、それはギリシア人らの宗教を遵奉して總督オレステスと親交を持った處女であった。そのヒュパティアは数学者テオンの娘で、数学に秀でていた。彼女の篤學な解説は、アポロニウスやディオファントスの幾何學を明らかにした。そして、彼女はアテナイでもアレクサンドリアでもプラトンやアリストテレスの哲學を公に教授した。満開の美と成熟した智慧とに接したこの謙虚な處女は、無数の求婚者を拒絶しながら弟子達を訓導した。身分や才

幹の最も顕著な人々が先を争ってこの処女哲學者の門を敲いたので、キリルスは彼女の學園の戸口に蝟集する馬車や奴隸の華やかな行列を嫉妬深い眼で眺めやった。總督と教長との融和にとつての唯一の障碍はテオンの娘である、との評判がクリスト教徒らのあいだに専ら広まった。四句説レントの神聖な季節中の或る日、ヒュパティアは自用馬車から引きずりおろされ、裸かに剥ぎ取られて教會堂へ引きずられ、朗讀者ベトルスをはじめ、野蠻で無慈悲な熱狂信徒らの手でむざんにも屠殺された。彼女の肉は牡蠣の殻で骨から削り取られ、まだびくびくしている手足は火中に投げ込まれた。この犯罪の詮索と刑罰との公正な進展は潤沢な贈物によつて中止された。しかし、ヒュパティア殺しはアレクサンドリアのキリルスの性格と宗教とに萬代不磨の汚點を印刻したのである。²⁸⁾

一読して容易に理解できるように、ギボンはソクラテスとダマスキオスに依拠し、それらをミックスさせて史実を再現している。しかし、ヒュパティアがアテナイで教えたという証拠はなく、先行する古代教会史家ル・ナン・ド・

ティルモンの叙述を引き継いだものと考えられている。²⁹⁾ また、ヒュパティアが生きながら「牡蠣の貝殻」で肉をこそげとられたというのは、このギボンの叙述から一般に流布することとなつてしまつたが、「牡蠣の貝殻で」に該当する原史料の言葉は「オストラコイス」(οστράκους)。これは有名な「陶片追放」＝オストラキスマスもここからきている「オストラコン」(οστράκον)という言葉の複数与格形で、貝殻のほかに陶器や陶製品の意味があり、陶製の屋根瓦の破片とも考えられる。いずれにせよ凄惨な場面に変わりはないが、ギボンの想像力からイメージが独り歩きした可能性は考えに入れてよい。

古代末期史に対するギボンの影響力は圧倒的なものがあるが、ヒュパティアに関しては一九世紀の作家チャールズ・キングズリの小説『ヒュパティア』³⁰⁾の存在が大きい。この作品は通俗小説の扱いで、文学史的にあまり高い扱いを受けているとは言えないが、同時代的にはよく読まれ、若くして美しい犠牲者というヒュパティアのイメージを決定的なものとした。

舞台はアレクサンドリア図書館の小窓から博物館の美しい庭園が見えるとある小部屋で、瀟洒な家具、調度品が目

を引く。しかし、もしその日その小部屋を訪れた人があったなら、そんなものには誰も目をくれないだろうとキングズリは書く。村山勇三訳で見てみよう。

と云ふのは、その華奢な安楽椅子には、二十五歳ばかりの婦人が――明らかにこの神殿の女神が、単純な古風な雪白のイオニア服をまとひ――中略――部屋の古雅な調子にシッくりあつた装ひで腰をおろし、テールの上に横たへられた寫本を讀んでゐるのだつた。³¹⁾

彼女はローマ市民身分であることを表示する紫の線が二筋入つた着物を着て、頭に黄金の網をかぶっていたが、それは彼女の髪とほとんど区別がつかず、「アテネ女神自身が羨みさうな色彩、房々しさ、縮れ模様であつた」。ただ、彼女の目には悲しげな様子がうかがえ、また「悟り済ました自制」や「気取り」が見えるが、しかし顔や姿の「目覚めるような気高さ」がそうした欠点を補うので、「壁上の鏡板に描かれてあるアテネ女神の理想的な畫姿に酷似したものを認めるに違いなかつた」³²⁾。

すでにトーランドやヴォルテール、ギボンに見られた理

想化は、こうしてキングズリによって完成された。ヒュパティアは、三度にわたつてアテネ女神のようであるとしてその知性と美の完璧な融合ぶりを称えられる。キングズリはプロテスタントの牧師で、主人公のヒュパティアは上述の取り済ました知性が危機に晒されるなかで次第にキリスト教に傾いていく。しかし、総主教キュロスと狂信的な追従者はこれに気づくことなく彼女を襲撃する。また、若い砂漠の修道僧フィランモンが彼女に心を寄せていくが、襲撃を止めることができない。キュロスたちはカトリックや国教会保守勢力を暗示しており、そこには啓蒙主義を経て、自由思想や科学思想と折り合いをつけつつ浮上してきた、十九世紀ヴィクトリア朝時代のイギリスのプロテスタント的倫理観を讀み取ることができよう。

同様の理想化は大陸諸国でも見られた。詩人ルコント・ドゥ・リルは一八四七年と、間隔を開けて一八七四年に『ヒュパティア』という詩を発表し、好評を博した³³⁾。その第二の詩で、ヒュパティアは「プラトンの精神とアフロディテの身体」の持ち主とされた。古代の神話にインスピレーションの源泉を求める彼の詩作は同時代に大きな影響力を持つていたので、そのヒュパティア像も決定的であつた。

これ以外にもイタリアやドイツで小説が書かれ、現在も各国で新作が現れているが、本稿では割愛する。

さて、それぞれにトーンの違いはあるとはいえ、権勢欲と狂信の無辜の犠牲者としてのヒュパティアのイメージは、ここに定まった。知性と美を兼ね備えたアテネ女神か、プラトンの知とアフロデイトの美を兼ね備えた淑女か、いずれにしても彼女は古代「異」教世界の最良、最善の部分の象徴であり、その死によって古代世界の知的探求は終わりを告げ、宗教と無知蒙昧の支配する暗黒の中世が開幕するのである。

二〇世紀前半の代表的な哲学者であるバートランド・ラッセルも、ヒュパティアに対するキュリオスのリンチを非難し、「この事件の後、アレクサンドリアが哲学者によって乱されることはやなくなった」と書いている。³⁴

b) 科学史と現代のヒュパティア像

以上のような啓蒙主義のヒロインとしてのヒュパティア像は二〇世紀を経て、二一世紀の現在にまで継続する。とくにこれは科学史の上で顕著で、彼女を科学者とみなすことができるからである。冒頭で引用したように、ダマスキ

オスは「彼女はディオファントスの注釈書、『天体の法則』、それにアポロニオスの円錐注釈書を著した」と書いている。また、彼女は父テオンのプトレマイオス『アルマゲスト』第三巻注釈を手伝ったと言われている。³⁵ 自然科学者ヒュパティアの姿は、弟子シュネシオスの書簡によっても側面補強される。彼の第一五書簡では、ヒュパティアに宛てて水力計（ハイドロスコープ）の作成法を尋ね、³⁶ 別の人物宛書簡では、彼女が天体観測用機器（アストロラーベ）発明にかかわったとも言及している。

そこで、数学史や天文学史でヒュパティアは注目を集め、専門誌で取り上げられてきた。カール・セーガンの一般向けの科学教養番組『コスモス』は、こうした科学者のヒュパティア観をよく伝えてくれる。セーガンは、この番組のなかでしばしばアレクサンドリアの自然科学の驚異的な高水準に触れたが、ヒュパティアをその歴史の最後に位置する科学者として評価している。彼は、アレクサンドリアとその図書館の偉大さを認めつつも、その偉大な発見が奴隷制度などの社会矛盾の改善に向けられることがなかったために、「神秘主義への降伏」を止めることができず、「ついに暴徒が図書館に焼き打ちをかける日がやってきた」と考

えた。そして――

この図書館で最後まで働いていた科学者は、数学者であり、天文学者であり、物理学者であり、新プラトン派哲学の指導者でもあった。この人は、あらゆる時代のどの科学者よりも幅広い業績を残した。この人は、ヒパチアという名の女性であった。³⁸

セーガンは、三九一年とされる図書館襲撃と四一五年と推定されるヒュパティア襲撃事件を混同している。また、奴隷制度への知識人の無関心に古代科学没落の原因を読み取っているところは、ロストフツェフなどによって確立された、古代社会没落に関する二〇世紀前半までの通説的な議論を反映させたものである。偉大であったが、その知識は図書館から出て人々に共有されることはなく、その破滅は歴史的必然であったという見方は、後述する映画『アゴラ』に強く影響を与えることになる。しかし、直接の原因としてはセーガンもキュリロスのヒュパティアに対する憎悪を挙げる。

キュリロスはヒパチアをひどくきらった。なぜなら、彼女はローマの知事と親しくしていたし、学問と科学のシンボルであったからである。昔の教会は、学問と科学とを、異教徒のすることみなしていた。³⁹

こうして、彼女は仕事に向かう途中、「キュリロスの教区民である狂信的な暴徒」⁴⁰に襲われることになる。

近年になると、科学史でもフェミニズムの観点からヒュパティアが取り上げられることになる。マーガレット・アールイクが、その著書『ヒュパティアの遺産―科学のなかの女性史：古代から一九世紀を通じて』⁴¹で、彼女を「マリー・キュリーがあらわれるまでのすべての女性科学者のなかでもっとも有名な女性」で、「数学と天文学の歴史に登場するほとんど唯一の女性」と賞賛している。⁴²そして、ヒュパティアが作成したとされるアストロラーベなどを中心に、科学者としての彼女の業績に筆を割く。アールイクの場合も、ヒュパティア虐殺の原因は「熱狂的なキリスト教徒の多くは数学と科学を異教であり、邪悪であるときめつけていた」⁴³からとし、ソクラテスの記述を引用しつつ、キュリロスに示唆された狂信的な「パラボラニ」⁴⁴修道士たちによって殺害

されたとする。

科学者にして狂信の犠牲となった殉教者という位置づけはさらに最近まで続く。マイケル・デーキンは一九九五年の著書、『アレクサンドリアのヒュパティアー数学者にして殉教者』の冒頭こう切り出す。

想像してみよう。世界で一番偉大な数学者が女性であった時代を。しかもその女性が肉体的にも美しく、同時に世界の指導的天文学者であった、そんな時代を。想像してみよう。そんな彼女が今日のアヨディーヤ⁽⁴⁵⁾、アムリトサル⁽⁴⁶⁾、あるいはバグダッドかベイルートで人生を送り、研究上の仕事を成し遂げたことを。

想像してみよう。そんな女性数学者が名声を博したのが、単に彼女の専門分野だけでなく、多くの民衆に支持される哲学者や宗教思想家としてもであったことを。

想像してみよう。彼女は処女殉教者だったが、キリスト教の信仰の故に殺されたのではなく、キリスト教徒によって、彼らの一人ではなかったが故に殺害されたということ。

そして、想像してみよう。彼女の死への有罪宣告が、キリスト教で最も名誉ある、重要な聖人の戸口で広くささやかれたことを。⁽⁴⁷⁾

「世界で一番偉大な数学者」で「指導的天文学者」が「肉体的にも美しい」女性であったというのは、キングズリの「アテネ女神」やルコント・ドウ・リルの「プラトンの神とアフロディテの身体」を彷彿とさせる。また、名指しされないが、はつきりそれとわかるキュリオスの列聖への批判もトーランド以来のもので、「異教の殉教者」としてのヒュパティアー像を継承している。ただし、古代の宗教と科学の対立（それがあったとして、だが）を現代の原理主義者の宗教的暴力と同一視して理解しようとするのは、古代世界への理解はもちろんのこと、現代の世界を理解する上でも大きな誤解を生みかねない。

もともと、デーキン自身の本文の叙述は扇情的ではない。彼の著書は衝撃的な最期ばかりが有名なわりに、ヒュパティアーがじつさいに何を成し遂げたのか十分検証されていないことに注目し、科学史的観点から史料を網羅的に整理しようとするものである。インターネット上では、この

デーキンをはじめ、理系研究者の手になるヒュパティア関連のサイトがいくつも散見でき、史料を入手することができる。⁽⁴⁸⁾

啓蒙主義、科学史のなかで培われたヒュパティアのイメージ狂信の犠牲となった最初の女性科学者、もしくは古代最後の理性―は、一般にも定着する。アレクサンドリア育ちのジャーナリスト、デレク・フラワールの『知識の灯台―古代アレクサンドリア図書館の物語』の終幕近い第三章は「アレクサンドリア学派の最後を飾る悲運の思想家ヒュパティア」と題され、彼女は「当代を代表する哲学者、一流の数学者・天文学者、古代世界における最も偉大な女性知識人」と評価されている。著者は「キュリロスは教会の最初の異端審問官としたいくなる」と述べ、キュリロスが「何とも無残で惨たらしい殺害を示唆した張本人であった」ことは「記憶にくつきりと刻みこんでおくべき」と明記している。

Ｃ）映画『アゴラ』と啓蒙主義

啓蒙主義と科学史の影響については、以上ですすでに十分過ぎるであろうが、最後にもう一点言及しておかなければ

ならない作品がある。それは二〇〇九年公開の映画『アゴラ』である。⁽⁵¹⁾恋愛映画の巨匠と言われるアレハンドロ・アメナーバル監督、知的な女性主人公がまり役のレイチェル・ワイズ主演の本作は、これまで三〇〇年にわたって築かれてきた啓蒙主義と科学史上のヒロインとしてのヒュパティア像をあますところなく美しく、叙情的に描写することに成功している。

アメナーバル監督にとりわけ影響を与えたのは上述カール・セーガンの『コスモス』で、宇宙から見た地球の映像が随所で登場する。⁽⁵²⁾さらに、当時のアレクサンドリアの社会理解も『コスモス』のとおりである。キュリロス率いる黒衣の修道兵士パラボラニは狂信の徒として描かれるが、彼らはパンの配給などの慈善事業で貧民や奴隷の心をつかむことに成功する。一方、ヒュパティアや父テオン等図書館の「異」教知識人は理性的ではあるが、奴隷制度の矛盾には気がつかない。

ヒュパティアはキリスト教徒によるセラペイオン襲撃事件で非戦・中立の立場を貫くが、その彼女も奴隷制については考えが及ばない。キリスト教徒の暴徒が図書館にだけ込もうとする騒然とした雰囲気の中、彼女は自分を慕う

奴隸デイヴォスを「Tidiot（愚か者）」と罵ってしまふ。傷ついたデイヴォスはパラボラニの二団に加わってしまふ。ここまでが第一部で、冒頭ヒュパティアは大理石の教室でオレステスやシユネシオスら学生たちに天体の運行について講義する。この二人のエリート学生もヒュパティアを慕い、映画後半で彼女を守ろうとする。

第二部は数年後のアレクサンドリアに舞台を移す。図書館の教室で彼女が教えていた学生たちもそれぞれ出世し、オレステスは総督に、シユネシオスはキュレネ主教になっていた。図書館襲撃後もヒュパティアは細々と研究を継続していたが、テオフィロスに代わって主教となったキュロスのユダヤ人迫害がこの平穩な生活を終わらせる。

惨状を見かねたヒュパティアは市参事会に乗り込み、オレステスにキュロス逮捕を懇請する。キュロスはヒュパティアを魔女と非難し、教会で女性に従順さと男性への服従を強いる新約聖書の一節⁵³を読み上げ、これをオレステスの頭上に掲げてひれ伏すように促したがオレステスは拒否。パラボラニの投石でオレステスは傷ついてしまふ。街にやってきたシユネシオスは参事会員全員の洗礼によって反キュロス派をまとめ、ヒュパティアも改宗させようと

するが、ヒュパティアはこれを拒絶。総督邸を出たヒュパティアはパラボラニに捕えられたが、駆け付けた元奴隸のデイヴォスが彼女の番をするふりをして、残酷な処刑の前に窒息させる。図書館の天井から見える青空と扇情的な回想シーンがクライマックスとなる。

この映画ではサイドストーリーとして、ヒュパティアの「地動説発見」が語られる。キリスト教徒に包囲された図書館で、夜に星を見つめて宇宙について人々が談義するなか、彼女はアリストアルコスの地動説に関心を寄せる。その後船上で慣性の法則を実験で証明。惑星の運動を正確に再現できないアリストアルコスの計算上の弱みを、彼女の得意とするアポロニオスの円錐理論の応用により克服、ケプラーに千年以上先だつて、惑星が楕円軌道を描く地動説を確立したが、その日に捕えられ、殺害されてしまふ。

美しい画面構成と手慣れた物語展開は観客を飽きさせず、また監督自身の育ったスペインのカトリック的背景を考えると、勇氣ある一石を投じた作品と言えるのかもしれない。しかし、最初この映画を英国で観た筆者は、プロテスタント系市民でなく、中東系、とくにコプト系市民などがこれを観た場合、どのように感じるの心配になつてし

まった。

科学と迷信、合理主義と非合理、上層階級と下層階級、ギリシア系の白人支配層と浅黒い肌のオリエント系現地下層住民、ユダヤ人とキリスト教徒、そして「異」教徒とキリスト教徒。啓蒙主義三百年間に形作られてきた二元論が、この映画では誰もが誤解しようのない、意図的に単純化された映像で示される。「白黒をはっきりさせる」という言葉があるが、この映画では文字通り衣服で白黒が分かれる。もちろん、古代の知性を象徴する「異」教徒が白服、キリスト教徒が黒服である。しかし、キリスト教徒でも弟子シユネシオスはなぜか中世西欧の高位聖職者のような白の法衣で、黒の法衣のキュリロスと向かい合う。

シユネシオスもヒュパティアも肌は白く、教養層の標準的イギリス英語で話す。一方、敵役のキュリロスはまるでタリバン司令官を思わせる中東系の顔立ちの俳優が演じ、その配下のパラボラ二たちは、筆者でもそれとわかる強いなまりのある英語で話す。ヒュパティアが惑星の楕円軌道に思い至る抒情あふれる画面が突如切り替わると、海辺でパラボラ二たちが虐殺したユダヤ人たちを焼いている。そして、なまりのある英語で、「地球が丸いんなら、どうし

て下のヤツは落っこちねえんだ、考えても見ろ」などと愚劣極まりない議論を続けるのである。

第二章 啓蒙主義の問題点と事実関係の確認

以上、いささか長きにわたって啓蒙主義の到来以降ヒュパティアが伝説化していく過程をたどってきた。その問題点を一瞥しつつ、事実関係を確認してみよう。

啓蒙主義におけるヒュパティアの伝説化は、一種の毒消しの役割を担ってきたといつてよい。キリスト教の教会は歴史の勝者であり、その一方的な歴史像は糺されてしかるべきであろう。しかし、反証のための誇張はあつてはならないし、より根本的に啓蒙主義以降の科学思想もまた、キリスト教と同様イデオロギー的であることは自覚されてよい。

たとえば、なぜヒュパティアは金髪の白人女性に描かれるのだろうか。本稿では著作権上の問題を考慮して写真・図版掲載は控えているが、挿絵やインターネット上で確認しうるヒュパティアの姿は西欧近代社会で理想とされる白く、美しく、若い金髪の女性が多い。これに対して、キユ

リロスや彼女を襲撃する男は浅黒い肌で髭を生やし、むさくるしい身なりの中東系の有色人種に描かれる。⁽⁵⁶⁾

しかし、ヒュパティアは史料にもあるように、アレクサンドリアに生まれ育ち、そこで息絶えた人物である。ギリシア系住民であったとしても、すでにアレクサンドロスの征服後数百年を経過しており、エジプトの現地住民との差異が目立っていたとは思われない。

また、宗教上の対立を階級対立に結びつける視点も現在では時代遅れというほかはない。映画『アゴラ』では下層住民が大半を占めるキリスト教徒側が圧倒的な数で図書館を包囲する。その情景は全アレクサンドリアの市民蜂起と言ってよい規模に描かれ、この場面をアメナーバル監督は「社会革命」ときっぱり明言する。⁽⁵⁷⁾これは上述セーガンの『コスモス』に依拠し、さらにセーガンはロストフツェフなど二〇世紀前半までの大家の通説をそのまま採用した結果であろうが、このような貧困階層による上層市民への社会革命的な階級闘争が行われたという説は史料の裏付けが欠き、これを支持する研究者は現在皆無である。⁽⁵⁸⁾

貧困階層はキリスト教、支配階層である知的エリートが「異」教というのでは、キリスト教を批判すると言いつつ、

実はその勝利を歴史的必然と認めてしまっているのと同じではないのだろうか。一番の問題は、このような見方では一見ヒュパティアを賞賛しているようで、実は「無辜の犠牲者」という以上の評価にはならないということである。

小説『ハイベシア』でも映画『アゴラ』でも、ヒュパティアの学問は同時代に着地点を持たない。映画ではオレステスに地球が動いていたからといって、暴力や死に満ちたこの世界にどういう意味があるのかと諭され、これに反論できない。⁽⁵⁹⁾小説では悩み苦しんだヒュパティアはなんとキリスト教に接近していく。トーランドも、ヴォルテールも、ギボンも、セーガンも、キュリオスの野心の犠牲者、古典文明消滅の象徴という以上の評価を何も与えていない。彼女の知性は素晴らしくとも、それはしょせん根なし草で、滅びに運命づけられたあだ花であるかのようなのである。しかし、ほんとうにそうであったのだろうか。

セラペイオン襲撃事件に関して言えば、現在確認できるのは、テオドシウス一世のキリスト教国教化政策に便乗して、総主教テオフィロスが配下の修道士たちを用いて攻撃を行ない、これに対してオリュンピオスらを指導者とする「異」教側が図書館に立て籠って防戦に努めたということ

である。ヒュパティアは中立を保っていたと思われる、この間の騒ぎには史料的に登場しない。オリュンピオスはキリア出身で、セラピス神殿で奉仕するために移住してきたと言われ、アレクサンドリア育ちのヒュパティアやテオンとは距離があったと思われる。キリスト教徒側も、すべての信徒が襲撃に共感して包囲攻撃に馳せ参じていたとは考えられない。

ヒュパティアに戻ると、彼女は自分の側からキリスト教サイドに攻撃を仕掛けるということがなかったため、そもそも迫害の対象にはならなかった。史料から確認できるのは、彼女の活動はむしろセラピス神殿破壊後の三九〇年代から最盛期を迎えているということである。⁽⁶¹⁾ シュネシオスらが学んだのもこのころと推定される。映画では襲撃前の図書館内での講義がヒュパティアの教授活動の最盛期で、その後は細々と私邸で活動をしているだけのようであったが、冒頭で引用したように、ソクラテスやダマスキオスによれば、彼女は街角で公然と人々を教えていた。そして、オレステスを含む街の高官、有力者たちが詰め掛ける情景がキュリオスの嫉妬を招いたのであるから、それは四一五年と推定される。⁽⁶²⁾ それに先立つ年月が彼女の教授活動の最

盛期であったのであり、とくにテオフィロス主教時代にはなんの妨害も受けることなく、彼女は「異」教徒だけでなく、キリスト教徒の学生も集めて講義していたのである。研究者のなかには、テオフィロスはヒュパティアを尊敬していたと考える者もある。⁽⁶³⁾

そもそも、当時の高等教育において、「異」教を完全排除することなどできなかった。最大の東方教父と言われるヨハネス・クリュソストモスの師はアンテイオキアのリバニオスであるし、カパドキアの三ツ星と言われる大バシレイオス、ナジアンゾスのグレゴリオス、ニュッサのグレゴリオスも「異」教哲学者に学んだ。西方でも、ちょうど同じころ、アウグスティヌスが人生を送っていたが、彼の思想を紡ぐラテン語教養は、カルタゴとローマの「異」教的な伝統学芸であった。

アレクサンドリアの状況を推測してみると、セラペイオン襲撃事件でオリュンピオスら多くの外部から来た知識人が逃げ出してしまい、事件で中立であった在地教養層の比重が大きくなった。⁽⁶⁴⁾ そのなかで傑出していたのがヒュパティアだったのである。三九〇年代から四〇〇年代初頭にかけて、彼女は決してメランコリックな、滅びに向かう軌

禁、幽閉状態のなかに生きていたのではない。むしろ個人的には上向きな、しだいに多方面から信頼を集めていく、人生の充実期を迎えていたのではないだろうか。

では、問題がキリスト教対「異」教ではないということになると、何がヒュパテア襲撃のきっかけとなったのだろうか。キャメロン以降、マリヤ・ジェルスカやワッツなどが異口同音に指摘するのは、問題は宗教的なものというより、政治的なものであったという点である。きっかけは四一二年の総主教テオフィロスの死とその後継者選出問題である。

テオフィロス死去後、キュリロスは決して満を持して選出されたのではなかった。大主教のテモテイオスという有力候補があり、ノヴァティアノス派が支持するほか、エジプト軍事長官 (*comes rei militaris per Aegyptum*) のアブダンテイオスも彼を支持していた。⁽⁶⁵⁾ ニトリアの砂漠の修道士などを味方につけ、三日におよぶストリート・ファイトでこれを制したキュリロスは、⁽⁶⁶⁾ 続いてユダヤ人集団とこを構える。この背景にも彼らがテモテイオスを支持した可能性が指摘されている。⁽⁶⁷⁾ この迫害が教会の権限を越えた行政権への侵害、越権行為としてオレステスに受け取られ

たことからオレステスとキュリロスの対立が深まり、オレステス側のブレーションとしてヒュパテアが浮かびあがってくるのである。

オレステスはキュリロスの越権行為と暴力沙汰について皇帝に報告する。慌てたキュリロスはオレステスに和解を求めるが、オレステスはこれを拒否。⁽⁶⁸⁾ キュリロスに従うニトリアの砂漠の修道士の一団がオレステスを襲撃して、投石により彼は傷ついてしまう。映画でも再現されたシーンだが、映画ではこのとき軍隊以外に総督を守る者はない。しかし、ソクラテスによると、護衛兵は逃げ去り、代わって駆け付けた「アレクサンドリアの市民たち」⁽⁶⁹⁾ によって総督は救助され。修道士の一群は砂漠へ逃げ去った。ジェルスカも指摘するように、この「アレクサンドリアの市民たち」は、「異」教徒だけではなかっただろう。

ヒュパテアがキュリロス一党の疑惑の対象となって浮上するのはこの段階においてである。オレステスがたびたび彼女に相談に行くことから疑惑を招いたのであるが、オレステスに限らず、後述のようにヒュパテアの弟子には高級官僚や軍事司令官に出世した者も多く、それもアレクサンドリアを越えて活躍しており、主教位を十分に掌握し

きつていないキュリロスには極めて危険な存在と映ったに違いないのである。

つまり、まだ盤石でない権力基盤で出発したキュリロスが、配下の修道士やバラボラニなどを用いた強硬路線で正面突破を図るなかで、次々に派生した事件のひとつとしてヒュパティアの虐殺も生じたと考えられるのである。⁷¹ワッツ、ジェルスカもこの事件に対するキュリオスの責任については疑いを持っていない。彼が直接命じたという証言は史料から得られないとしても、配下のバラボラニや朗読者ペトロスがだれのために動いたかを考えると、その責任は免れない。しかし、この事件を古代的知性の終焉や、野蛮な迷信の合理主義的理性への勝利の瞬間として位置づける啓蒙主義以来の伝統に関しては、疑問の余地が大きいことが了解されよう。

ヒュパティアは北西欧系の顔立ちではなかったかもしれないが、地動説もおそらくは発見していなかった。しかし、中東系の彫りの深い顔立ちで人を魅了していたのかもしれないし、プトレマイオスの代数学や天文学、アポロニオスの円錐などについて理解できるうえ、哲学も講釈できた。そして、その学問は決して根なし草ではなかった。セラペイ

オン破壊以後の三九〇年代から四〇〇年代初頭に多くの弟子を集め、市民を相手に堂々と講演したことからわかるように、彼女の学問は人々に支持され、理解されていた。

そして、残酷なその死によっても彼女の学問の遺産は完全に失われることはなかった。ひとつには、その残酷な死が市民たちの記憶に刻み込まれ、忘れられなくなったことがある。たとえ、表面上キュリオスの権力が支配的になろうとも、ヒュパティアの死に対する記憶は消滅させることができなかった。ソクラテスやダマスキオス、ニキウのイオアンネスらに共通した特徴からは、これらの史料が依拠したエジプト、アレクサンドリアの史料の存在が想定される。これ以外にも、アレイオス派の著作家フィロストルギオスの著作や、ネストリオス派に伝わる名不詳の『ヒュパティアの手紙』がキュリロスを批判し、彼女を自派に引き寄せる主張を展開している。⁷²彼らの主張にはヒュパティアの事例を持ち出せば教敵キュリロスを非難することができるといふ計算が読み取れるが、しかしその計算が成立するためにはこの事件が人々に記憶され、なおかつその記憶がヒュパティアに同情的で、キュリロスには弱みとなる形で人々に浸透している前提が必要である。

それから、ヒュパティア自身の学問の成果が何も残っていないという通説にも反論がある。プトレマイオスの『アルマゲスト』第三巻の注釈でヒュパティアは父テオンを手伝ったとされるが、年齢や男女のジェンダー役割による差別を考慮に入れると、その仕事はテオンを名代に、じつさいにはヒュパティアが行ったと見ることもできるのである。⁷³もしそうなら、我々はヒュパティア自身の手になる学問的業績を現在手にしているのであり、その全面的喪失を嘆くことはないのである。

そして、学芸に秀でた彼女のイメージは、啓蒙主義以前のアレクサンドリアを含む中東、ビザンツ世界に受け継がれた。ビザンツ世界では賢い女性のことは「第二のヒュパティア」として称えられたのである。⁷⁴アリストルコス⁷⁴の地動説が古代において一度も主流になったことがないことも銘記しておくべきかもしれない。映画のような「地動説発見」は極端であるとしても、古典古代の高度な科学と砂漠の修道士の無知は常に対照的に描かれてきた。しかし、ヒュパティアやその父テオンの学んだ天文学はプトレマイオスのそれであり、彼らがそれを越えたという証拠はない。そして、中世を通じてプトレマイオスの地理、天文学は尊重

されたのであるから、学問上の断絶を過度に言いつるのは禁物である。

そもそも、古代の学芸の消滅というが、西欧カトリック世界に古典学芸が十分に継承されなかったことと、中東エジプトでの古典学芸の終末を結びつけるのは、地理的にも時代的にも無理がある。もともとほとんどつながりのない地域と時代に連続性を求め、その不在を嘆いているだけに見える。「暗黒時代」をいうのなら、ヨーロッパではなく、アレクサンドリアのある同じエジプトでその後どのような中世の学芸上の暗黒時代が到来したかを考えねばならないはずだが、そのように思考されない。アレクサンドリアからはヨーロッパだけでなく、ビザンツやイスラームに連続的に文化の継承があつたことが、ものの見事に忘れ去られているのである。

第三章 よみがえるヒュパティア…

「異」教の女性聖人

ヒュパティアに関する伝説の検証と事実の再確認の作業はまだまだ多くの課題を残すであろうが、以上で基本

的な部分は指摘できたように思う。最後に、彼女のライフコースを時間軸に沿ってふりかえるとともに、ジェルスカやワッツも指摘していない点、すなわち、ヒュパティアが同時代のキリスト教女性聖人と相通する社会的背景のなかでその権威を上昇させていった可能性について触れてみたい。

ヒュパティアは通説では三七〇年生まれで、四一五年に惨殺された。享年四五歳である。キングズリーの二五歳は極端に若すぎるとしても、この通説にも最近の研究者は疑問を提起している。それは彼女の弟子のシユネシオスが同じく三七〇年前後の生まれとされているからである。ヒュパティアの学芸サークルが三九〇年代に確立していたとなると彼女は二十歳前後で同年代のシユネシオスを教えていたことになる。古代の歴史家にも彼女の若さに疑問を呈する向きはあり、六世紀のマララスは「老いた女性」と書いている。⁷⁶父テオンの活動時期も早められる傾向にあり、ジェルスカなど最近の研究者はマララスに基づいて享年六〇歳、三五五年ごろの生まれと推定するようになってい⁷⁶る。もともと、マララスの記述は一般に信用が低く、シユネシオスの年齢なども完全に確定しているわけではないので、

通説が全く否定されたというわけではない。ともあれ、以前考えられていたより早く生まれていた可能性が強いということである。

彼女は父の薫陶を受けつつ、ソクラテスやダマスキオスの記述を信用するならば、やがて父をも凌駕する才能を示しはじめる。父が健在の期間中に、しだいに父の肩代わりをしながらその学頭になっていったのである。女性である点が問題化しなかったのかについては今後さらに検証が必要であるが、四世紀のペルガモンにエウナピオスの伝える女性哲学者ソシパトラの先例がある。⁷⁷公的な職業としてはともかくも、私的な関係のなかで教授することについて何ら問題はなかったはずで、これは教会と修道院における女性が私的な寄進、巡礼、修道生活を通じて社会的権威を上昇させたのとよく似ている。

彼女はおそらく三八〇年代末頃にはその知的サークルの最初の基礎を築き、三九〇年代には大きくそれを拡大した。セラペイオン襲撃後、オリュンピオスらが逃亡してしまつた以上、アレクサンドリアの上層市民の子弟で古典学芸を身につける場所は限られ、そのなかでテオンの娘の私的サークルの比重は上昇していったのである。この学校で

育ったシユネシオスは三九五年ごろにはキュレネに戻り、三九〇年代末にはキュレネとペンタポリスを代表してコンスタンティノープルに赴き、その後またアレクサンドリアを經由してキュレネに戻った。⁽⁷⁸⁾ 彼は師ヒュパテアをはじめ、同窓の元学友に手紙を書き、それによってヒュパテア・サークルの輪郭がある程度理解できる。⁽⁷⁹⁾

彼の友人にはヘルクリアヌスのようにエジプト生まれでシユネシオスがキュレネに戻った後もアレクサンドリアに留まった者もあれば、オリュンピオス（セラピス神殿襲撃事件のときの守り手側指導者とは別人）のようにシリア、ピエリアのセレウケイア市の資産家子弟もいた。⁽⁸¹⁾ 彼は前者には田舎のキュレネでは哲学の話をする相手がないとこぼし、後者とは共通する狩りや馬に関する話をしている。サークルには、ほかにヘルクリアヌスの兄弟キュロス、シユネシオスの弟エウオプテイオス、テオレクトゥス、それに遅れてオレステスが加わり、高級官僚や軍事司令官などに出世した者が何人も含まれる。⁽⁸²⁾ そこからは当時の参事会身分クラスの上層子弟の交流の一端がうかがわれるのであるが、師ヒュパテアに直接当たった手紙はもちろん、彼女について友人同士で交換する意見によって、ヒュパテアの

学芸の性格について、ある興味深い事実が浮かび上がってくる。それは、彼らがヒュパテアに「神のごとき魂」を認めていることであり、それによって彼らは導かれているという共通認識であった。これについては後述する。

ヒュパテア・サークルはテオフィロス総主教時代には平穏な日々を送った。ヒュパテアは父テオンともども、当時ギリシアなど「海外」で勢力のあったイアンブリコス・グループとは一線を画しており、セラピス神殿襲撃騒動でも中立であつたうえ、キリスト教徒の弟子も分け隔てなく受け入れていた。⁽⁸³⁾ プロティノスを軸とする新プラトン主義がその学風の基礎になるのだとすれば、それは伝統的多神教というよりも、どの神と言わず、ひとつの真理に至る道筋を解明しようとするものであつたのだろう。とすれば、それは偏狭な党派主義にこだわらなければ、キリスト教にも非常に近いものであつたのかもしれない。ワッツが指摘するように、⁽⁸⁴⁾ キュリロスはヒュパテアを除くことで、潜在的な同盟者を除いてしまったともいえる。

そして、キュリオスの主教位就任とともに、ヒュパテアの身边は次第に騒然とした情勢になり、運命の日を迎えることになるのであるが、反復を避けたい。ここでは、彼

女の社会的権威の上昇について、現在の研究を踏まえた上で、筆者なりの新しい展望を最後に示しておく。

それは、ヒュパティアが同時代に活躍したキリスト教の女性聖人たちと同じ社会的回路を通じてその権威を高めたのではないかという展望である。ヒュパティアとキリスト教聖人信仰の重なりといえば、すでに聖カテリナ（アイカテリナ、エカテリニ）信仰が良く知られている。ヒュパティアより百年ほど前にアレクサンドリアで殉教した聖人とされるが、創作性が強く、ヒュパティアにかかわる物語を吸収して作られたのではないかと言われる女性聖人のことである。しかし、ここで議論したいのは、教会側の介入による聖人信仰への在地信仰取り込みのプロセスではなく、ヒュパティア自身の権威上昇過程が、同時代の小メラニアやエウドキア皇后、それにプルケリアなどといったキリスト教修道運動とのかかわりで権威を上昇させた女性たちと相通する側面があるという点である。

これまでの研究、とくに啓蒙主義や科学史の枠内でヒュパティアを捉えようとする研究においては、そもそも同時代のキリスト教女性聖人との共通理解などという発想自体がなかった。一方、近年の古代末期研究においては、「異」

教とキリスト教はすでに対立的に捉えられなくなっている。しかし、ワッツやジェルスカの研究を見ても、今度は専門性が障壁となるのか、あくまでアレクサンドリアの「異」教知識人のサークル、あるいは横断的といってもヒュパティア・グループの分析にとどまっていて、その外側で胎動している同時代的な情勢との連動性、とくに女性が宗教的修行を通じて権威を増大させる事例が―たとえレトリックや教会プロパガンダの部分が多いにしても―多くなってきていたこととのつながりまでは視野にいれていない。

しかし、これまで長くキリスト教女性聖人や巡礼、それも同時代のそれに関心を抱いてきた筆者としては、両者の類似性と共通点に関心を抱かざるを得ないのである。

上述したように、シユネシオスは師ヒュパティアに「神のごとき魂」の存在を見ていた。それを彼自身の最後の手紙となるヒュパティア宛書簡から読み取ってみよう。書簡は四一三年で第一〇書簡とナンバリングされている。

親愛なる先生。あなたと、あなたを通じて親愛なる仲間たちへ、挨拶を送ります。私は自分が手紙をいた

だくに値しないと思われているのかと、長い間いぶかしんでいます。今ではあなたからすっかり軽蔑されてしまったのかと考えています。これは私がなにか悪事を働いたからではなく、多くの者がそうなるように、私が多くの事柄で不幸に遭遇しているからなのでしょうか。

あなたからのお手紙を得ることさえできれば、そしてあなたがいかにお過ごしかを知ることさえできれば——いや、きっとあなたは幸せで、幸運を享受しておられることと確信しています。そうすれば、私はあなたの幸福を喜ぶことで、自分の困難の半分から救われるのです。しかし、今あなたの沈黙が逆に私の悲しみの総計を増しています。私は子どもたちを失いました。友人も、だれからの温情もです。しかし、最大の打撃は、あなたの神のような魂の (της θείας σου ψυχής) 導きが消えたことなのです。運命の転変や悪いめぐりあわせを克服するために、私はあなたのこの魂が常に私のところにとどまるようにと願ってきたのです⁽⁸⁵⁾。

これは単なる個人崇拜なのだろうか。しかし、同時代の

キリスト教聖人は「神の人」と呼ばれていたし、キリスト教徒にして新プラトン学者でもあったシユネシオスが気まぐれや偶然の一致でこのような語法を用いるとは考えられない。彼は魂だけでなく、彼女の肉体も聖なるものと捉えていたようで、オリュンピオス宛書簡で彼女の「聖なる手を取った」 (αφῆρα της ἁγίας χειρός) と表現している⁽⁸⁶⁾。

啓蒙主義歴史家や科学史研究者が見落としているのは、彼女の「科学」や「哲学」は真理を求める宗教的修行の一環であるという視点である。個別には「数学」や「天文学」、「哲学」などと分かれて見えるものも、彼女にあつてはおそらく神の一つの叡智に至る手段のそれぞれの現れに過ぎなかったのである。

もうひとつ考えるべきことがある。それは、ヒュパティアが同時代の多くのキリスト教女性聖人や巡礼と同じく、独身を貫いていたことである。「スーダ」によると、彼女は哲学者イシドロスの妻とも記されているが、これは年代が合わない⁽⁸⁷⁾。ダマスキオスは「異」教知識人としてヒュパティアを賞賛する一方、その「異」教知識人の系列のなかでは自らのアテナイの学派をより優れたものと考え、ヒュパティアを低く見る傾向がある。すなわち、彼は自らの

系列に近いイシドロスに従う者としてヒュパティアを描こうとしたのであろう。彼のヒュパティアに関する記述は重複しており、最初の部分ではヒュパティアの結婚が語られるが、次の長い部分では彼女は「処女のままであった」(ἁγία καὶ ἄπαντος)と矛盾する説明を展開し、結婚を拒絶する説話めいたエピソードを書き加えている。

彼女が美しく、麗しかったので、彼女の信奉者のうちの一人が彼女に恋してしまい、自分を抑えることができずに、彼女に自分がくびったけであることを明らかにしてしまった。この無益な知らせを受けたヒュパティアは、彼の苦悩の原因を音楽で癒そうとした。しかし、ご多分に洩れず、音楽は無駄骨に終わった。そこで彼女は彼女の月経の血で汚れたほろ布を集め、彼女の汚れた降下物のしるしとしてそれらを彼に示し、そして言った。「若者よ、これがあなたの愛したものです。そして、それは美しくない。」若者は醜い光景に大そう恥じ入り、驚いたので、彼は心変わりし、よりよき人間になった。⁽⁸⁸⁾

生理を汚れたものとして描写するダマスキオスの筆づかいには、彼女をイシドロスの妻とするのと同じ「貶しめ」の感情が感じられ、そこには男性執筆者の歪みを読み取ってもよいだろう。しかし、もうひとつ、ここにはこの世で割り振られたジェンダーを離れ、それとは別個に自己自身の価値を見出そうとする女性の意思を読みこむことも可能である。おそらく、これはキリスト教と「異」教に共通して流布していた禁欲的文学モチーフ、もしくは伝承をあてはめたものであるが、いずれにしても、ヒュパティアとはそのような禁欲的实践を行う人物であるという共通理解ができあがっていたことを物語る。

つまり、彼女は独身にして、地上の男性を選ばず、天上の真理もしくは叡智と合一することで、かえってこの地上において隔絶した権威を上昇させていった人物なのではないか。そして、それは同時代のキリスト教女性聖人が、地上の男性を選ばず、「イエスの花嫁」となることで、かえって地上における権威を増大させていったのとよく似ている。

小メラニアは首都ローマで富裕な元老院家系に生まれ、夫を説いてともに巡礼と修道の生活に入り、夫の死後は単

独で修行を続け、帝国の東西で名声を高めた。⁹⁰⁾ エウドキアはヒュパティアと同じく「異」教哲学者の父の下にアテナイで生まれ、幼名アテナイスと称したが、皇帝テオドシウス二世の認めるところとなって結婚し、キリスト教に改宗して名をエウドキアと改めた。しかし、その名を高めたのは小メラニアの説教を宮廷で聞いて巡礼の旅に出かけてからである。⁹¹⁾ 後に彼女は夫帝と事実離婚状態となるが、隠遁先で伝説化した聖人となっていく。プルケリアはそのテオドシウス二世の姉で、結婚をしない誓約をすることでかえって宮廷で権威を増大させ、エフェソス、カルケドン両公会議を実質的に主宰した。⁹²⁾ ヒュパティアもまた、この時代を生きた女性であり、宗教の看板が異なるだけで、意識してかは別として、同じ権威上昇の道筋を歩んでいったのではないだろうか。

ただ、そうすると、キュリオスの恐れや嫉妬は、ジェルスカやワッツの予測とは違って、やはり政治的なものだけではなかったのかもしれない。それは、彼女が単に有力な人脈を有するだけでなく、同時期のキリスト教女性聖人と同様の、あるいはそれを超える権威を持つてしまうかもしれない、否すでに持つてしまっているという危惧である。

しかも、ヒュパティアはただ「イエスの花嫁」として祈るだけでなく、哲学の弁論術、天文学や数学の理論、天文機器や水力計を操る技術を持ち、「異」教徒だけでなく、キリスト教徒をも魅了していた。それは滅びゆく過去の知性ではなく、同時代の禁欲的風潮に合致し、キリスト教も「異」教も合わせて成長する可能性を秘めた、極めて同時代的な知性だったのである。そして、その彼女が敵対する有力者集団の要に位置し、その精神的支柱となっている――キュリオスがオレステスやそのほかの要人でなく、彼女にターゲットを絞ったのは、まさにそれ故であったのだろう。キュリオスの目論見は、一見すると成功したかに見える。オレステスは逃げ出したのか、それ以降史料からばつたりと姿を消す。キュリオスはアレクサンドリアの実権を掌握し、その後三〇年近く君臨して、四三一年にはアンティオキア出身の首都総主教ネストリオスを追放することにも成功した。配下の修道士は首都の路上でも同じ暴力行為を繰り返し、民衆を扇動した。帝国の行政権代表のオレステスを正面から攻撃していれば、このような道筋が開かれていただろうか。彼だけでなく、敵対する上層グループの精神的支柱をへし折ることで、キュリオスの目的は当面のどこ

ろ、見事に達成されたのである。

しかし、彼は本当に勝利を収めたのであろうか。たとえ
ば、ダリヤピカソのような鮮烈なイメージの作品を描く画
家がいちしよう。その人物を危険視して捕え、処刑し、
作品を没収、処分したとしても、一度存在が明らかにされ
たその独特の世界は、もはや消し去ることはできない。人々
の脳裏からその記憶をすべて消去しなかり勝利はあり
得ないのである。そして、ヒュパティアもまた、人々の記
憶にとどめられた。

ヒュパティアに関する史料は多くない。しかし、沈黙が
逆にキリスト教徒たちの負い目を語る雄弁な史料なのかも
しれない。時に彼女に言及する史料があると大半は好意的
で、逆にキュリロスには嫌悪感が示されることになった。
キュリオスの法灯を継ぐニキウのイオアンネスが開き直つ
て彼女を魔女と決めつけても、それ自身がかえってヒュパ
ティアの影響力の大きさを証言するものとなってしまふ。

ヒュパティアを想起するとき、必ず引用される史料が
ある。この作品の作者や謳い上げられている対象のヒュ
パティアについても別人説はさまざまにある⁹³。しかし、た
とえそうであっても、その混同はヒュパティアとはこのよ

うな人物であるという人々のイメージと合致したために生
じ、記憶されてきたのである。そして、それは啓蒙主義時
代ではなく、古代末期のエジプトに生じ、中世のビザンツ
を経て継承されてきた記憶である⁹⁴。

さいわい、詩文として形が整っている訳文があるので、
そこから引用したい。

尊いヒュパティア、あなたは学びの光彩、思慮深い教
師の汚れなき星。あなたの姿と言葉に触れるたび、私
はあなたを崇拜し、空に輝く乙女の住まいを見上げる。
なぜなら、あなたの行いは天にあるのだから。パラダ
ス『ギリシア詞華集』九一四〇⁹⁵。

キリスト教と「異」教を問わず、天上に権威の所在を求
め、地上にその代理人を認める古代末期の心性が、ここ
には見事に表現されている。

おわりに

さて、以上古代末期の「異」教女性哲学者ヒュパティア

の人生について、それを歴史の文脈の中にどう位置づけるかを試みた。もちろん、まだ粗削りな試論にとどまっている。折々ジェルスカが分析しているヒュパティア・サークルの人的構成とその思想内容についても、ごく簡単に触れることしかできなかった。

しかし、一般に流布している啓蒙主義時代以来のヒュパティア像を訂正することはできたと考えている。彼女は滅びゆく古代文明の最後を飾る悲しいあだ花だったのでなく、同時代に根を下ろし、長期間にわたって多くの人材を育てた人物だったのである。

そして、もう一点、それはこれから精査していく必要のある課題だが、彼女を「異」教側の、より正確には「異」教とキリスト教を横断して成長した女性聖人と見る視点である。単なる政治要因のみで彼女の死を説明する近年の学説は、啓蒙主義の大きな文明論と交代するにはどこか矮小な、手続き論にとどまっているように見える。彼女の虐殺の背景には、やはり宗教的な、しかし啓蒙主義の見立てとは異なった時代的要因が絡んでいたように思われるのである。それは、古代末期という時代をいかに見るかにかかわる課題である。

もちろん、現時点では通り過ぎる車窓から、川べりに一瞬蛍光を見たレベルに過ぎない。しかし、その川には確実に蛍がいる。それを探しに車から降り、史料の叢に分け入ってみよう。

注

- (1) Socrates Scholasticus, *Historia Ecclesiastica*, in: J.P. Migne ed., *Patrologiae Graecorum* (PG) 67, 1859, VII, Cap. XV, p.768. (以下 Socrates VII, XV と略す。)
- 大谷哲氏が PDF にて同ソクラテス七卷一三—一五章日本語訳をアップロードしている。ただし、本稿では筆者自身の拙訳を用いる。 http://researchmap.jp/mui71nxvo-28455/?action=multidatabase_action_main_filedownload&download_flag=1&upload_id=11703&metadata_id=16380
- (2) A. Adler ed., *Suidae Lexicon*, Teubner, Stuttgart, 1989 (primaed 1935), n.166 “Υρτυτα”, pp.644-666. (以下 Suidae と略す。)
- (3) A. H. M. Jones, J. R. Martindale, and J. Morris, *The Prosopography of the Later Roman Empire*, vol.1, AD260-395, Cambridge, 1971 (以下 PLRE I と略す。同じく J. R. Martindale ed., Vol.2, 同 PLRE II とする。) p.907 に彼についての史料典拠あり。
- (4) ムセイオン (Mousson) はクレネスム世界の学術センター

- のことで、今日の英語でいう、博物館 (Museum) の語源である。その最大のもはプロトレマイオス朝の王プロトレマイオス一世の建設したアレクサンドリアのムセイオンで、ヘレニズム世界最大の規模を誇った。ユリウス・カエサルのエジプト侵攻時に火災で焼失したと推定される。しかし、姉妹図書館でセラピス神殿付属の図書館のセラパイオンが古代末期まで存続。また、ムセイオンの会員称号が今日の学士院会員のようにな誉あるものとして継続しており、テオンはこの重要メンバーであったと思われる。
- (5) *Suda*, p.644.
- (6) A. Garzya, *Synesii Cyrenensis Epistulae*, Scriptores Graeci et Latini, Romae, 1979.
- (7) M. Dzielska (F. Lyra tr.), *Hypatia of Alexandria*, Cambridge, Massachusetts, 1995, "Hypatia and her Circle," pp.27-65. (以下 M. Dzielska, *Hypatia* と略)
- (8) Socrates, VII, XV, p.768.
- (9) *Suda*, p.645.
- (10) Socrates, VII, XV, p.769.
- (11) *Ibid.*, p.769. 「 $\mu\upsilon\sigma\epsilon\iota\omicron\upsilon\mu\alpha$ が起 $\mu\upsilon\sigma\epsilon\iota\omicron\upsilon\mu\alpha$ したのはキュリオスの主教位四年目、ホノリウスのコンスル就任一〇年目、テオドシウス二世)のコンスル就任六度目、三月の四旬節の $\mu\upsilon\sigma\epsilon\iota\omicron\upsilon\mu\alpha$ であった」この記述による。
- (12) 啓蒙主義時代の文献出典は、次章の本文言及時にそれぞれ註で示した。
- (13) 一九八六年に創刊の雑誌『*Hypatia: A Journal of Feminist Philosophy*』のこと。ワシントン大学のマリソン・ワイリーが編集主幹で、女性の多様な経験に基づく多様なフェミニズム思想の学際的な研究誌として構想された。http://depts.washington.edu/hypatia/
- (14) Alejandro Amenarar, Rachel Weisz, *Agora*, Spain, 2009. 日本では、アレハンドロ・アメナーバル監督、レイチエル・ワイズ主演「アレクサンドリア」として二〇一一年劇場公開 (キヤガ GAGA 配給)。
- (15) キングズレー著、村山勇三訳『ハイペシア』春秋社出版、大正十三年。
- (16) 岡野玲子作 (原作夢枕獏) 『陰陽師』第二巻、白泉社、二〇〇五年、二六六―二七三頁。
- (17) K.H.Christy tr., *The Chronicle of John, Bishop of Nku* (Translated from Zolenberg's Ethiopic Text), Merchantville, NJ., 2007 (Originally published in London, 1916), pp.100-102.
- (18) 註(9) 参照(9) 参照。
- (19) Socrates, VII, XV, p.769.
- (20) *Suda*, p.645.
- (21) M. Dzielska, *Hypatia*, p.88.
- (22) Alan Cameron, J. Long, I. Sherry, *Barbarians and Politics at the Court of Arcadius*, Berkeley, 1993; P. Brown, *Authority and the Sacred: Aspects of the Christianisation of the Roman Empire*, Cambridge, 1995. 後者については、拙書評がある。

- 『奈良史論』二三三号(二〇〇五年)七五—八六頁を参照のこと。
- (23) E. Watts, *City and School: In Late Antique Athens and Alexandria*, Berkeley, 2011. Esp. pp.187-203. (以下、Watts, *City and School* と略す。)
- (24) John Toland, *Hypatia: or the History of a Most Beautiful, Most Virtuous, Most Learned, and Every Way Accomplished Lady: Who was Torn to Pieces by the Clergy of Alexandria, to Gratify the Pride, Emulation, and Cruelty of their Archbishop, Commonly but Underservedly Titled St. Cyril, London, 1720*. ただし、筆者は London, 1753, British Library 保存版のロニー (Eccoco Print Edition, 2011) を用いる。
- (25) *Ibid.*, p.3.
- (26) *Ibid.*, p.35.
- (27) Voltaire, F.-M., *Examen important de Milord Bolingbroke écrit sur la fin de 1736*, London, p.185.
- (28) エンワーズ・ギボン著、村山勇三訳『ローマ帝国衰亡史』第七巻、岩波文庫、昭和三十一年、二七五—二七六頁。
- (29) Le Nain de Tillemont, *Mémoire pour servir à l'histoire ecclésiastique des six premiers siècles*, Paris, 1701-1730, XIV, pp.274-276. ただし、筆者は M. Dzielska, *Hypatia*, p.24 を参照。
- (30) Ch. Kingsley, *Hypatia: or New Foes with an Old Face*, London, 1853. www.bibliobazaar.com にあるオンライン・レビューの Amazon.co.jp 製本版を利用してゐる。
- (31) キングズレー著、村山勇三訳『ハイペミア』三九頁。
- (32) Kingsley, *op.cit.*, p.31.
- (33) Edgar Pich, *Lecomte de Lisle et création poétique: poèmes antiques et poèmes barbares* (1854-74), Lille, 1974, pp.160ff. ただし、筆者は Dzielska, *Hypatia*, pp.4-5 を参照。
- (34) B.Russell, *History of Western Philosophy and Its Connection with Political and Social Circumstances from the Earliest Times to the Present Days*, London, 1946, p.387.
- (35) A. Cameron, *Barbarians and Politics*, p.48.
- (36) Antonius Garzya ed., *Synesi Cyrenensis Epistulae*, Scriptores Graeci et Latini, Rome, 1979, Ep.15. pp.35-36.
- (37) 現在、オリジナルのテレビ番組の日本語吹き替え版は入手できない。ただし、英語版でDVD化されており、その Volume 5, Episode 13 でアレクサンドリア図書館とピュパティアの最後にこの解説がつけられている。Carl Sagan, *Cosmos: One of the Greatest Scientific Series of All Time*, Cosmos Studies, 2000 (Fremantle Home Entertainment, 2009) 視聴の上英語字幕を確認したが、下記翻訳はこの部分を忠実に訳出している。カール・セーガン著、木村繁訳『コスモス』朝日文庫、昭和五九年、下巻、三〇七—八頁。
- (38) カール・セーガン著、木村繁訳、同上書、三〇七頁。
- (39) 同上、三〇八頁。
- (40) 同上。
- (41) M. Alic, *Hypatia's Heritage: A History of Women from Antiquity*

- through 19th Century, Boston, Massachusetts, 1986, 3-2, "Hypatia of Alexandria," pp.41-44. 上平初穂' 上平恒' 荒川 弘訳『男装の科学者たちーヒュパティアからマリリー・キュリーまで』北海道大学図書刊行会、一九九九年、五四ー六〇頁。丁寧な邦訳だが、おそらく日本での販売を出版社が考慮したためであろう、表題は原題と全く別物となっている。しかし、この本に登場する女性は「科学者」として共通性は有している、ヒュパティアも含め、男装は共通項ではない。本稿では翻訳内容を尊重しつつ、原題の直訳を挙げておいた。
- (42) 上平ほか訳、同上書、五四頁。M. Alic, *Hypatia's Heritage*, p.41.
- (43) 上平ほか訳、同上書、55頁。M. Alic, *Hypatia's Heritage*, p.42.
- (44) キュリオスの私兵集団の役割を果たした人々で、全員が修道僧とは限らない。
- (45) インドのウツタル・プラデシュ地方の地名で、ヒンドゥー教徒がかつて自分たちの聖地であった場所にあるイスラーム・モスクを襲撃したところから紛争が始まった。
- (46) インド北部パンジャブ地方の都市で、一九一九年に反英暴動が起こり、独立後はシーク教徒とインド政府の間で争いが続いていた。
- (47) M. A. B. Deakin, *Hypatia of Alexandria: Mathematician and Martyr*, NY, 2007, p.13.
- (48) たとえば、ディーキン自身の作成したヒュパティア史料紹介サイトは次の通り。 <http://www.polyamory.org/~howard/Hypatia/primary-sources.html>
- (49) デレク・フラワー著、柴田和夫訳『知識の灯台ー古代アレクサンドリア図書館の物語』柏書房、二〇〇三年、二一八頁。D. A. Flower, *The Shores of Wisdom: The Story of the Ancient Library of Alexandria*, Ramsey, Isle of Man, 1999.
- (50) 同二二三頁。
- (51) 註(15)を見よ。日本語版DVD(発売元、ギャガGAGA、販売元、松竹株式会社)には、各場面に合わせて監督がスペイン語で製作用意図を語る「オーディオ・コメンタリー」が日本語字幕付きで収録されている。筆者は2010年、在外研修時にイギリスで同映画を観賞し、大変感銘を受けた。本稿執筆にあたっては、上述DVDを視聴。
- (52) 上述「オーディオ・コメンタリー」にて監督自身が語っている。
- (53) 日本語字幕では「ダオス」であるが、作品中の英語 Davus とその発音に合わせた。
- (54) 『テモテへの手紙』第二章二―二二節「婦人は、静かに、全く従順に学ぶべきです。婦人が教えたり、男の上に立つたりすることを私は許しません。」
- (55) 「オーディオ・コメンタリー」にて監督自身が語っている。
- (56) ヒュパティアを白人に描く伝統に対しては、アフリカ女性の立場からの反論も生じてきた。B. Lumpkin, "Hypatia and Women's Rights in Ancient Egypt," *Journal of African*

- Civilization*, 6.1,1984, pp.155-156.
- (57) 「オーネーオ・コメンタリー」参照。
- (58) 階級闘争、民族闘争のステレオタイプを越えようとする現代的な研究はすでに多くの蓄積があるが、二点のみ言及する。
T. E. Gregory, *Ioix Populi: Violence and Popular Involvement in the Religious Controversies of the Fifth Century A.D.*, Ohio State Univ. Press, Columbus, 1979; E. J. Watts, *Riot in Alexandria*, Berkeley, 2010.
- (59) 「オーネーオ・コメンタリー」参照。
- (60) *Olympus 2* in : *PLRE I*, p.647; M. Dzielska, *Hypatia*, pp.79-83, Watts, *City and School*, pp.189-192.
- (61) M. Dzielska, *Hypatia*, pp.66-82, Watts, *City and School*, pp.187-196.
- (62) Socrates, VII, XV, p.769.
- (63) M. Vinzent, "Oxbridge" in der ausgehenden Spätantike oder: ein Vergleich der Schulen von Athen und Alexandria, " *Zeitschrift für Antikes Christentum* 4, 2000, pp49-82, esp.,71-72.
- (64) Watts, *City and School*, pp.193-196; M. Dzielska, *Hypatia*, p.83.
- (65) *PLRE II*, p.3; ノンノトスの記述のロウ版ラテン語註に *dux militum Aegypti*。Socrates, *HE*, VII, p.750.
- (66) Socrates, *HE*, VII, 7, pp.749-752; Watts, *City and School*, pp.196-7; M. Dzielska, *Hypatia*, pp.84-85; S.Wessel. *Cyril of Alexandria and the Nestorian Controversy: the Making of a Saint and of a Heretic*, Oxford, 2004, pp.15-22.
- (67) C. Haas, *Alexandria in Late Antiquity, Topography and Social Conflict*, Baltimore, 1997, pp.298-301; Watts, *City and School*, p.197.
- (68) Socrates, *HE*, VII.13, pp.759-766.
- (69) Socrates, *HE*, VII.14, pp.765-767..
- (70) M. Dzielska, *Hypatia*, p.87.
- (71) S.Wessel. *Cyril of Alexandria*, pp.46-57.
- (72) Philostorgius, *Historia Ecclesiastica*, VIII.9; Mansi, *Conciliorum omnium amplissima collection*, V. たゞし、筆者は「すれ」 M. Dzielska, *Hypatia*, pp.20-21 に依る。
- (73) A. Cameron, *Barbarians and Politics*, p.46-49; M. Dzielska, *Hypatia*, p.72.
- (74) 十一世紀の歴史家プセルロスが「あの賢いエジプトの女性」といえば、読者はいよいよ断らなくともそれが誰のことかわかったし、十四世紀にニケフォロス・グレゴラスは皇帝アンドロニコス二世パレオロゴスの息子、コンスタンティノス専制公の後エウドキアを「第二のヒュパティア」と称えている。
- (75) Malalas, *Chronographia*, Bonn, 1831, XIV.p.359.
- (76) M. Dzielska, *Hypatia*, p.68; E. Watts, *City and School*, p.187; ジェルスカが引用するものと古くはパティア六〇歳説は S. Wolf, *Hypatia die Philosophin von Alexandria*, Wien, 1879, p.12.

- (77) M. Dzielska, *Hypatia*, pp.117-118.
- (78) Synesius I, in : *PLRE II*, pp.1048-1049.
- (79) M. Dzielska, *Hypatia*, pp.27-65.
- (80) *PLRE II*, p.545; M. Dzielska, *Hypatia*, pp.29-32. 「ヘルクリアヌス」(Herculianus) はラテン語表記からの日本語変換であるが、*PLRE II* ではほかに Heraclianus などの別人の項目もあり、記載通りのカタカナ転記とした。
- (81) M. Dzielska, *Hypatia*, pp.32-35.
- (82) ヘルクリアヌスの兄弟のキュロスは *PLRE II* で東部方面軍長官 (Praefectus Praetorio per Orientem) にまで登りつめ、四四一年にコンスルとなった Flavius Taurus Seleucus Cyrus と推定されている。 *PLRE II*, pp.336-337.
- (83) M. Dzielska, *Hypatia*, pp.80-83; E. Watts, *City and School*, pp.200-201.
- (84) E. Watts, *City and School*, pp. 202-205. ヒュパティアを殺害したことで、逆にそれまでアレクサンドリアで影響力を伸ばせなかった、キリスト教に好意的でないアテナイのインブリコス系統の学派の流入を招いてしまったという。
- (85) Synesii, *Ep*, n.10, pp.30-31.
- (86) Synesii, *Ep*, n.133, p.230.
- (87) *PLRE II*, pp.628-631. 五世紀後半の人物。ヒュパティアとの結婚はヘシキオスによる創作が収録されたと見られてゐる。
- (88) *Suida*, p.644.
- (89) *Suida*, p.644.
- (90) E. A. Clark, "Asceitic Renunciation and Feminine Advancement: A Paradox of Late Ancient Christianity," *Anglican Theological Review* 63, 1981, pp.240-257; E. A. Clark tr., *The Life of Melania the Younger*, Lewiston, 1984.
- (91) K. Holm, *Theodosian Empresses: Women and Imperial Dominion in Late Antiquity*, Berkeley, 1982, pp.112-130, 176-179. 井上浩一『ビザンツ皇妃列伝』筑摩書房、一九九六年、十四五一四二頁。
- (92) 足立広明「皇姉ブルケリアー帝国と教会を支配した禁欲の処女」『歴史学研究』七〇四号、一九九七年、二四一三六頁。
- (93) M. Dzielska, *Hypatia*, pp.22-23; G. Luck, "Palladas Christian or Pagan ?," *Harvard Studies in Classical Philology* 63, 1958, pp.455-471.
- (94) Palladas, in: *PLRE I*, pp.697-698.
- (95) ジャスティン・ポラード、ハワード・リード著、藤井留美訳『アレクサンドリアの興亡ー現代社会の知と科学技術はここからはじまった』(原著：J. Pollard, H. Reid, *The Rise and Fall of Alexandria: Birthplace of the Modern Mind*, London, 2006.) 主婦の友社、二〇〇九年、四二八頁。ただし、パラダス引用は「一」から「九」に変更。史料としては次のものがある。H. Beckby ed., *Anthologia Graeca*, Buch IX-XI, München, 1958, Buch IX, 400, S.250.